

ロナルド・ドーア

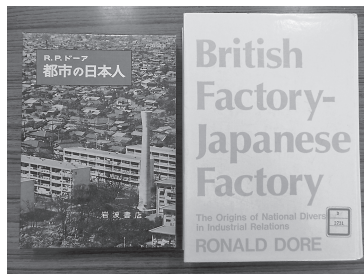
——『都市の日本人』と『イギリスの工場・日本の工場』——

玉野和志（首都大学東京大学院人文科学研究科教授）

R.ドーアの『都市の日本人』（1958年）は、W. F. ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサイエティ』やリンド夫妻の『ミドルタウン』と並んで、モノグラフ的なコミュニティ研究の範例として、長い間日本で親しまれてきた古典的な作品である。戦後間もない頃に日本を訪れたイギリスの日本研究者が、「下山町」と称する町に住み込んで書き上げたのが、この作品である。そこには、今では日本の読者にも信じがたいような当時の東京の住宅事情や家族制度のあり方、夫婦や友人、町内の生活が描かれている。本人も言及するように、構成や叙述のスタイルはリンド夫妻の『ミドルタウン』を踏襲している。統計的な数値も含めた調査地の概要に、具体的な生活の点描、調査票の質問にたいする回答結果を引証しつつ展開する事例の紹介など、随所に『ミドルタウン』の影響が感じられる。ただドーアの場合、「下山町」には限定せずに、いつの間にか日本の村落での生活や伝統に関する一般的な話に移っていきところが、コミュニティ・スタディとしては異色である。福武直らが行っていた「社会学的実態調査には、進んで参加を申出るのがつねであった」というドーアの日本での幅広い調査経験が生かされたのだろう。また、本書が日本での翻訳出版の際にはその部分が削られているとはいえ、やはりイギリスでの日本社会紹介の意味合いをもった出版物であった点が影響しているのかもしれない。この意味で（けっしてドーアを念頭においての批判ではないだろうが）、安田三郎の「我々日本人が喋ったことが英語の調査報告書として世界的に評価されるのをみて、何とニガニガしく思ったことか」という感慨が当てはまらないわけではない。この意味で本書は、戦後間もない頃にイギリスの研究者が日本について書いた本としての時代的制約を免れてはいない。

同様に、本書の問題設定についても、『ミドルタウン』が近代化の過程で地域生活が具体的にどう変わったかを探求したように、『都市の日本人』ではイギリスをモデルとした近代化の進んだ社会から、日本がどの程度隔たっているかを明らかにすることが念頭におかれている。ドーアの尋常ではない日本通ぶりは、つとに言及されることであるが、この点でも当時の日本の社会科学において支配的であった問題設定との親和性が高いところがある。本書が長く日本の読者を惹きつけてやまなかった理由の1つには、そのようなこともあるのかもしれない。しかしながら、このような問題設定についても、今となってはいささか異論の出るところであろう。同時代の社会はたとえ形態は異なっても共通の課題を抱えているとみるべきで、けっして進化論的に位置づけられるべきものではない。もっともこのような限界はドーアの後時代のモノグラフである『イギリスの工場・日本の工場』（1973年）では見事に乗り越えられている。この意味でむしろドーアの調査については『都市の日本人』以降の時期をもっと正当に評価すべきなのかもしれない。

いずれにせよ、このようなドーアの時代と対象にたいする鋭敏な感性と過剰なほどの他者理解の能力に、この手の研究がそれゆえに孕むどうしようもない限界とともに、達人たるゆえんがあるというべきであろう。



有賀喜左衛門

佐藤健二（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

まだ私が学部学生だった頃、慶応大学の講演会（あるいは公開の大学院演習か）で、一度だけお会いしたことがある。ほんの少し、柳田國男を勉強していると話した。有賀先生は、自分は20代の頃から柳田と接した、今の時代に若い学生が柳田と取り組もうというのはうれしいといった意味の感想を漏らされた。しかし私が大学院に進学するより前に有賀先生は亡くなられて、石神村の調査のことなどお聞きすることはできなかった。

中村吉治氏の回想を読むと、実態調査をやっていない研究は一発で否定したというし、中野卓氏の見聞では、調査票をもって分担先に「遊びに行くよ」と出かけ、本当に隣村から遊びにきたかのように過ごしながら、訊くべきことは上手に話してもらっていた、という。そういう有賀先生の「調査の達人」ぶりを、残念なことに私は知らない。しかしながら、「名子の賦役——小作料の原義」のテーマを深めた『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と小作制度』や、渋沢敬三らとの研究旅行に始まる石神村モノグラフの『日本家族制度と小作制度』を読むと、その調査研究の「分厚さ」を確かに感じる。それは有賀自身が、小作人ともつきあう大地主の心やさしき跡取り息子で、村をよく知りまた愛し、目や耳の敏感なフィールドワーカーであったことだけに由来するものではないだろう。

あの記述や分析の分厚さは、あえて言えば調査という対話が終わったあとに、それなりの時間をかけて構築されたものなのではないだろうか。

たとえばその一例として『日本家族制度と小作制度』を開いてみる。その主題の設定と対象の分類において、引用されている先行研究は数多く、自分の採集だけでなく郷土史家や民俗学者の全国各地の事例報告や古文書のなかの記載に及び、この要約と鳥瞰それ自身がなかなかのフィールドワ

ークである。さらに石神村モノグラフなどでは、表に整理された各種の資産や生業の統計資料、図示された間取りや人の行動、さらに墓の配置にいたるまで、視覚的・空間的な把握が工夫されている。たぶん有賀自身にとって、そうした見通しやすさを構築することが、理解するうえで大切だったのであろう。驚いたのは、家を示すものとして表示された番号が、単純に機械的に区別できればよいという技術的水準での設定ではなく、村への定着や家の分化の順序を含み込んだ歴史の整理になっていたことで、それらは観察したままでない調査研究の奥行きを作り出している。さらに私が『社会調査史のリテラシー』で「写真の読み下し」と論じたような、写真を図解して呼称等を補い、写っていない部分までデータ化している点なども新たに作り出された厚みである。

もちろん、集計整理や加工処理や地図化や読み下しに耐えられるだけの情報を集めてくることも不可欠である。その点では竹内利美氏も指摘していたが、著作集未収録の『郷土調査要目』（1933年）の「民俗」の多様な項目提示などは、同時期に公開された戸田貞三『社会調査』とは別の意味で重要である。有賀のモノグラフがいかなるまなざしのうえに構築されたものなのかを、課題の継承を含めて考えさせる。たしかにどれだけ精密であれ、調査の項目は「生活といふ一建造物の多くの窓の如きもの」でしかなく、どの窓もそこから覗いて「眼に見ゆるがその全部にあらず、耳に聞ゆるがその全部にあらず」だろう。生活全体の連関を想像する力を養えとの教えは、今日でも有効である。

信濃教育會編	郷土調査要目	昭和八年一月
--------	--------	--------